
病みつき彼女

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつき彼女

【Nコード】

N5427BA

【作者名】

勸b

【あらすじ】

病みつきシリーズ第14弾!!

“私もあなたを愛してますからね”

少年橘祐司はある日彼女羽川告白された!

だが、そんな2人のことを快く思わない人物が現れて――――

『恋愛に、駆け引きなんて飾りだろ』

(前書き)

初めての(連載予告は除きます)一次短編です。

暇潰しにでもなれば幸いです

俺、橘祐司は放課後に校舎裏に呼び出された。

校舎裏にだなんて呼び出されたら、カツアゲなのかとも思ったがその心配は無用だろう。

何故なら、俺を呼び出した彼女、羽川翔子はそんなことをするタイプの人間ではないからだ。

羽川翔子

俺が所属する2年3組の委員長。

生真面目を絵に書いたような性格だ。

そんな彼女が俺をカツアゲする姿なんか想像出来るか？

俺には無理だね。

でも、カツアゲじゃないなら校舎裏になんて何で俺を呼び出さんだろうか？

それこそ、同じクラス何だから教室じゃ出来ない話なのかな？

まさか、告白とか——

「わ、私と……っ、付き合ってください!!」

校舎裏に着いて真っ先に言われた。

……えっ？

「橘君のことが大好きです！ 付き合ってください！！」

突然の展開に困惑する俺を畳み掛けるように、羽川さんは大声で言う。

こ、告白！？

でも、何で！！？

俺と羽川さんには接点が全くと言っていいほどない。

それこそ、羽川さんが俺に告白するほど重大な接点なんて無い。

俺が驚きの余り黙っていると、羽川さんは徐々に涙目になる。

「私じゃ、橘君の彼女に……してもらえませんか？」

ちよっ！

羽川さんみたいな可愛い子に告白されるなんて、今後の人生にあるか……

いや、無いな！

断言出来る！！

そもそも、羽川さんみたいな可愛い子と話す機会があるかどうか

も危うい人生だろうな！

そうとわかっているなら、答えは1つ！！

この一秒にも満たない時間を使い今後の自分の人生を灰色だと決め付けた俺は涙目な羽川さんに言う。

「俺なんかでよければ、よろしく……お願いします」

橘祐司

2年3組に所属する特に不思議な力がなければ、自分は特別だと思いつく厨二病患者でもない一般的な高校生。

そんな俺のプロフィールに『彼女いない暦』年齢が消え、『彼女あり』が追加された。

俺の家はちょっと大きめのマンションにある一室だ。

そこで俺は、エロゲー、ギャルゲーの主人公よろしく独り暮らしをしている。

両親はこれはまた、どこぞのエロゲー、ギャルゲー主人公設定にありがちな海外出張だ。

そんな俺と主人公に違う点があるとするなら、『毎朝起こしてくれる幼なじみ』や『兄思いの健気な妹』さらには『可愛い弟の面倒を見てくれる姉』が居ないことだろう。

特に、姉属性がある俺からしたら姉がいないのは残念だ。

妹よりも姉の方が需要あるはず。

俺はその事実を信じて疑うことはないだろう。

そんな俺にも先日、それこそ幼なじみや姉、妹よりも大切な人が出来た。

彼女のことを考えていると丁度チャイムが鳴った。

俺は真っ先に玄関に行き扉を開ける。

「おはようございます、橘君」

目が合うと俺の彼女、羽川さんは丁寧に朝の挨拶をした。

「おはよう、羽川さん」

彼女が朝に向かいに来てくれるなんて何というリア充生活!!

「それじゃ、行こうか」

俺が歩きだすと羽川さんも俺の隣で歩く。

「橘君は今日のお昼も購買ですか？」

「そのつもりだよ」

「あ、あの！ 橘君にお弁当を作ってきたんですけど……」

徐々に声を小さくし、後半はギリギリ聞き取れるぐらいの声で顔を赤ら俯きながら言う羽川さん。

お弁当……だと……！？

彼女からお弁当を作って貰えた！？

母親以外の女性にお弁当どころか、料理すら作って貰ったことない俺あてに！？

「ありがとう！ 嬉しいよ！！」

「そうですか」

羽川さんはほっとすると「えへへ」と恥ずかしそうに笑う。

「もし橘君が入らないって言ったらどうしようかと心配しました」

「羽川さんに作って貰った弁当を俺が入らないだなんて言うはずがないよ」

つか、弁当を作って貰ったにも関わらずそれを入らないだなんて言う人にはなりたくない。

「あ、あの それじゃ、私のお願いを聞いてくれますか」

お願い？

羽川さんみたいな可愛い子のお願いなら何でも叶れる自身がある
ぜ。

「お昼は……その、私と2人で食べて……ください」

もじもじしながら、顔を真っ赤にして言う羽川さん。

何この子可愛い。

「そんなの俺からお願いしたいぐらいだよ、一緒に食べようって」

羽川さんはそれを聞き、嬉しそうな笑みを浮かべる。

そんな羽川さんを見て俺も笑みを浮かべた。

昼が楽しみだな。

――――

昼休みに入るには四時間もの退屈な授業を受けなければならない。

今は昼休みに入る一つ前の放課、三時間目の授業が終わってすぐ
だ。

三時間目の授業は移動教室だったためクラスに戻ろうとした俺を誰かが声を掛けて止めた。

「探したわよ、祐司」

……？ 誰だ？

俺を呼び止めた彼女を見る。

思い出せないぞ？

「ねえ、祐司」

彼女は俺に近づいてくる。

なかなか綺麗な人だけど羽川の方が好みだな。

「羽川さんと付き合ってたって話は本当なの？」

彼女は俺の真ん前に立つと軽く睨んでくる。

もう噂になってるんだ！？

「本当だけど」

「何で？」

間髪いれずに彼女は言う。

「何で私に優しくしときながら他の女と付き合ったの？」

私に優しくしたんだから私に気があるんでしょ？

何で私じゃなくて羽川さんと付き合ったの？

私じゃないのは何で？

祐司は私のこと好きなんじゃないの？

違うじゃないね。

祐司は私のこと大好きなはずだね。

なら何で羽川さんと付き合ったの？

祐司は私と付き合わないとダメでしょ。

私と祐司は相思相愛なんだから」

……はぁ？ はぁ！？

いきなり何を言ってるんだよ。

「なあ、お前は——」

「どうかしたの橘君」

お前は誰なんだと言おうとしたら彼女、羽川さんが俺の名前を呼びながら近づいてきた。

「あっ、こんにちは天野さん」

天野……？

羽川さんと知り合いで、俺とも知り合い……なのか？

「こんにちは羽川さん」

彼女、天野さんは不機嫌そうに羽川さんに挨拶をした。

「橘君に何か用？」

「別に、何でもないわ」

そう言うのと俺と羽川さんに背を向けて歩いていった天野さん。

結局誰だったんだ？

「橘君、早くしないと放課終わっちゃうよ」

「えっ？ マジで？」

「はい、マジです」

せっかくの放課を無駄にしちゃったな。

……天野さん

結局、誰なんだ？

――
待ちに待った昼放課の時間になった。

俺は羽川さんと共に屋上に行き、周りに人がいない場所で食べる

ことにした。

羽川さんから貰った弁当はシンプルながらも美味しかった。

互いに弁当を食べおわり、余った時間を使い談笑していると俺は天野さんのことを思い出した。

「羽川さんは天野さんと友達？」

「友達って言うほどの仲じゃないですよ、去年同じクラスだったじゃないですか」

「えっ？ そうだったけ？」

俺は去年のクラスメイトの顔を思い出す。

ついでに、去年も俺と羽川さんは同じクラスで彼女去年もクラス委員長をやっていた。

委員長とかが好きなのか？

いや、今はそんなことより天野さんのことをだな……

「天野さんと橘君は余り話したことが無かったから忘れてるのか
もしれませんか」

えっ？

「何で俺と天野さんが余り話してなかったの知ってるの？」

「えっ!？」

何で羽川さんが去年の俺のことを知ってるんだ？

確かに同じクラスだったけど、

何で羽川さんが去年の俺のことを知ってるんだ？

確かに同じクラスだったけど、去年はまだそれだけの関係。

いわば、知り合い以上友人以下の関係だ。

そんな関係であつた俺のことを羽川さんは何で誰と話してたかまで知ってるんだ？

「ほ、ほら天野さんって余りクラスメイトと進んでコミュニケーションを取ろうとしない方でしたから。

そんな天野さんが橘君と話していたら忘れませんよ」

コミュニケーションを取らなかった？

今日見た感じだと、とてもじゃないがそんな風には見えなかった。

……わからない

まあ、天野さんのことは追々考えるところ。

頭の隅にでも置いておけば充分だろ。

「ねえ、橘君」

「……？　どうしたの羽川さん？」

何時もとは違い冷たく、暗い感じの声で俺を呼ぶ羽川さん。

どうかしたのかな？

「何で橘君が天野さんのことを気にしてるんですか？」

「そりゃ、見覚えがない人がいきなり自分の名前を呼んできたら
気になるだろ」

「名前で！？」

羽川さんは軽く驚く。

そういえば、俺が名前で呼ばれていた時には羽川さんはまだい
なかったっけ。

見覚えがない人には名前で呼ばれるのに、彼女には呼ばれない。

複雑な心境だな。

おっ、そろそろ時間か

「羽川さん、もうすぐチャイムが鳴るから教室に戻ろう」

「名前？　私は橘君を名前で呼んでないのに……あんな女が橘君
を名前で……？」

小声でぶつぶつと何かを呟いている羽川さん。

羽川さん？

「羽川さん！」

「ひゃい！？」

大声を出してやっと羽川さんは正気に戻ったのか俺の声が届くようになった。

「そろそろ教室に戻ろう」

「えっ？ あっ、そうですね戻りましょうか」

らしくなく取り乱している羽川さん。

普段はもっと冷静で知的な感じなんだぜ。

……天野さんの話は羽川さんの前では止めたほうがいいかもな

天野さんの話を聞いた後の羽川さんは明らかにおかしかった。

肝に銘じておこう……つつても、天野さんに会う機会なんてもう無いんだろうけどな。

放課後、羽川さんは来るべき文化祭の学年会議とやらで、一緒に帰ることができない。

悲しいけど仕方がない。

彼氏として彼女の用事を優先して一緒に帰るのは諦めよう。

会議が終わるまで待とうとも思ったが羽川さんに「それは悪いですから」とやりわり断られたため俺は帰路に着いた。

そしてそれは、俺が校門から出た時に起きた。

「遅いわよ祐司」

昼放課で俺と羽川さんとの会話で出てきた彼女、天野さんが俺に声を掛けてきた。

誤解されないように言っておくけど俺と天野さんは今日一緒に帰る約束なんてしていない。

つか、あれから一度も会ってなかった。

「どうかしたの祐司」

黙っている俺を覗き込むように見ながら、俺の目を見つめてきた。

「天野さんは俺を待ってたの？」

「そうよ、今日から祐司と帰ろうと思って」

今日から

からと言うことは、これからは俺と帰ることを勝手に決めたら
しい。

迷惑だな

純粹にそう思った。

俺には羽川さんという彼女がいるし、今日はたまたま彼女が忙しいから帰れないだけで、これからは羽川さんと帰るつもりでいる。

余談だが、俺と羽川さんは同じ電車を使って登下校している。

羽川さんは俺と同じ電車というのを知っていたが俺はその事実を聞かされるまで知らなかった。

羽川さんは去年から俺のことを見ていてくれたのかもしれない
——いや、見ていたのだろう。

これで違ったら恥ずかしいな、ただの勘違い男じゃないか。

「ほら、帰ろう」

「えっ、ちょ!?!」

天野さんは俺と手を組むと歩きだす。

生まれてこのかた女性と手を組んだことが無いのは勿論、母親以外の女性と手を握った覚えもない（子供の頃にはあるかもしれないけど、そんなの覚えてないだろ？）俺はこんな時にどう反応すればいいのかわからないため大人しく着いていく。

どうする、振り払うか？

でも、そんなことしたら天野さんに悪いし……

天野さんいい匂いだな。

ッ！ 待て待て！ 俺には羽川さんっていう立派な優しい彼女がいるんだぞ！！

だからこそ、ここは手を払って――――

内心で葛藤しながらも俺は結局駅のホーム迄天野さんに引っ張られていった。

駅のホームに着いてもなお天野さんは俺から離れてくれない。

「天野さん、そろそろ離れてくれない？」

「嫌よ、私が離れたら羽川さんがまた祐司を私から奪いにくるもん」

奪いにくるって

俺は元から、天野さんのモノじゃないし、つーか、俺と天野さんはそんなに深い接点はないんだから俺が誰というかが天野さんには関係ないじゃないか。

「祐司は私の傍から離れさせない。

祐司は私の隣にいればいいの。

それが、祐司の幸せだから」

天野さんは俺に口を挟ませる気が無いのか、一気に言う。

「だって、祐司と私は相思相愛なんだもん。

そんな私達の関係が羽川さんに壊されかけちゃったけど、直ぐに元通りになるよ。

一度壊されかけたのが修復出来ずに別れるなんて悲しい話はドラマとか恋愛小説だけで充分だもん。

それに、祐司と私ぐらい仲が良いと直ぐに修復出来るよ。

ううん、先ず壊されかけることも無いよね。

祐司と羽川さんが付き合ってるだなんて嘘だよね。

羽川さんの妄想とか妄言だよね。

祐司はそれに嫌々合わせてあげてるんだよね。

そうとしか考えられないよ。

祐司は優しいから羽川さんに合わせてあげてるんだよね。

ダメだよ祐司

祐司が優しいから羽川さんみたく勘違いしちゃう女が出るんだよ。

祐司は私以外優しくする必要なんて無いのにさ。

祐司が今後も誰彼かまわず優しくするんなら私だって考えがあるんだよ。

余り祐司の行動を強制させたくないし無理矢理言うことを聞かせるようなことも私はしたくないの。

だから

そうならないように

私が祐司を縛る前に

祐司は私の言うことをなるべく聞いてね」

愛おしいモノを見るような目で

恍惚とした表情で

甘い誘惑を感じる声で

何処か狂気を孕んだ雰囲気で

天野さんは俺に言った。

言い切った。

何故だろう頭が働かない。

上手く思考がまとまらない。

何で天野さんは俺にこんなことを言うんだ？

俺を強制させたくない？ 俺を縛る前？

———言うことを聞く？

「何で、そんなこ———」

「あっ、電車が来たよ」

そう言つて天野さんが指差すと丁度ホームに電車が止まった。

俺は天野さんに引つ張られるまま電車に乗り込んだ。

———
気持ち悪かった

いや、電車がじゃ無いよ。

自慢じゃないけど、俺は乗り物には強い。

そういえば、乗り物に弱いとは聞くけど、乗り物に強いは余り聞かないね。

とにかく気持ち悪かったんだ。

気持ち悪すぎで、吐き気を通り越して頭が働無かった。

思考が上手くまとまらなかった。

それぐらいの気持ち悪さ。

彼女、天野さんの思いはそれぐらい気持ち悪いモノだった。

まるで俺を自身の言うことを忠実に聞く人形のように思っているのかもしれない。

全くと言っていいほど俺は天野さんを憶えていない。

それなのに、天野さんは俺をそれぐらい思っている。

意味がわからない。

何があっただ。

俺は去年、彼女に何をやったんだ。

「祐司」

「ッ！ 何？」

俺は慌てながら天野さんの方を見る。

するとそこには、俺が昔から見ていた馴染み深い建物があった。

「マンションに着いたよ」

何で天野さんが俺の家を知ってるんだよ……！？

今の感情を顔に出さない様子を遣いながら、俺は天野さんから離れる。

「それじゃ、私は帰るね」

そう言って来を道に振り返る天野さん。

どうやら、彼女の家は通りすぎていたらしい。

天野さんは3歩ほど歩くと足を止め「あ、そうだ」と何かを思い出したのか俺の方を見る。

「また明日」

満面の笑みで言う天野さんを直視出来ず俯くことしか出来なかった。

彼女、天野さんは昨日の出来事で俺の中の二度と会いたくない人物と二度と関わりたくない人物に堂々と1位を飾った。

だからなんだと言われたら、何でもないとしたか答えようが無い。

とにかく、俺は天野さんとは会いたくないし、関わりたくない

人物ということをおいてくれ。

だが、そんな我が儘を言って学校を休めるわけがなく、自慢の彼女に心配を掛ける分けにもいかない。

俺は行きたくないという気持ちを押さえながら、今日も迎えに来てくれた羽川さんと共に学校に向かった。

「昨日は天野さんと一緒に帰ったらしいですね」

電車の中で椅子に座っていると羽川さんは急に切り出してきた。

「……うん」

本当だったら、そんなことないとも言えいいのだが、羽川さんはどこか確信めいたモノがある。

今の言い方でそんな気がした俺は大人しく昨日の事を話すことにした。

「腕組んでましたよね、一緒に校門から出ていくところを見ました」

やっぱり、知ってたらしい。

「ごめん、彼女である羽川さんがいるのに……」

「大丈夫ですよ、悪いのは天野さんなんですから」

さも当然かのように羽川さんは言った。

「それに、天野さんと橘君は方向が逆だから駅のホーム迄しか一緒にいられないじゃないですか」

———えっ

逆方向

確かに羽川さんはそう言った。

俺の聞き間違えはないだろう。

それを聞いて思ったのは、わざわざ来てくれたのかという気を遣わせた感じではなく、やはり気持ち悪さだった。

何で天野さんは俺にそこまでするんだよ！

「どうかしましたか橘君、顔色が悪いですよ」

「……何でもないよ、心配しないで」

心配掛けたくないというのもあるが、天野さんに羽川さんを合わせたら羽川さんに何がしらの被害がありそうで怖い。

だから、天野さんの件は俺が解決する。

俺が終わらせる。

「橘君」

羽川さんは短く俺の名前を呼ぶと手を組んできた。

「私は昔から独占欲が強いんです」

だから、と羽川さんは続ける。

「橘君が私から離れるのは我慢できません」

か細い声で俯きながら、でも、俺の手を強く握りながら、まるで俺を自分の傍から離れさせないように強く握りながら羽川さんは言った。

「……わかった」

こういう時に自分のボキャブラリーの無さに絶望したくなる。

本来なら彼氏として彼女を安心させることを言うべきなのにな。

俺と羽川さんは目を合わせる。

そして

そのまま互いに顔を近付ける。

———が

「た、橘君！」

少し上ずった声で再度俺は名前を呼ばれた。

「その……今度」

真前にある羽川さんの徐々に赤くなる顔を見ながら、彼女の言葉を待つ。

「今度の土曜日に橘君の家にお邪魔してもいいですか!？」

突然の提案に俺が困惑していると羽川さんは続ける。

「私、橘君のこともっと知りたいから」

そんなことを言ってくれる彼女を拒むわけにはいかず、俺は即座に了承した。

今度の土曜日に俺しか利用しない家に彼女が尋ねる。

これはもしかしたらもしかするかもしれない。

まあなんだ、俺のプロフィールにまた1つ消えることがあるかもしれないというわけだが。

そして土曜日……というわけにもいかず、時間は放課後。

彼女である羽川さんは今日の予定は無いらしく、一緒に帰るところになった。

だが、俺には一つ気掛かりがあった。

“また明日”

そう言って別れた彼女、天野さんのことだ。

そして、彼女は今日も居た。

「今日は早いね、祐司」

校門を出ると同時に天野さんが俺に……いや、俺達に声を掛けてきた。

「天野さん」

そんな天野さんに反応したのは俺の彼女である羽川さんだ。

「橘君は私の彼氏ですから、天野さんは余り関わらないでくれませんか？」

橘君と余り親しく絡んでこないでくれませんか？

天野さんからしたら橘君は赤の他人じゃないですか。

そんな関係の天野さんが橘君に親しくするのは可笑しいと思います」

羽川さんは俺と腕を組むと天野さんに冷たく言い放った。

「私の橘君に近寄らないでください」

独占欲が強い

そう自身を評価した羽川さんからしたら天野さんが俺に言いよって来たのは我慢ならないことだったのかもしれない。

「……黙れ」

天野さんは俯くと呟くように言う。

「元々私の祐司に近づいたのはお前の方だ！

お前が邪魔しなければ私と祐司は幸せなカップルだったんだ！
私から祐司を取ったのはお前だ

……返せ

私に祐司を

……返して」

後半はギリギリ聞き取れるぐらいの声で呟く天野さん。

「帰りましょう橘君」

羽川さんはそんな彼女を無視するかのように冷たい反応だ。

「天野さんのことなんて放っておきましょう」

それだけ言う俺を引っ張る羽川さんに合わせて歩きだす。

天野さん……？

彼女は俯いたままだ。

俺は彼女に何をしたんだ？

どういう出会い方をしたんだ？

……わからない

思い出せない

———ごめん

内心で謝罪しながら、俺は嬉々として話す羽川さんに適当に相づちを打ちながら駅に向かって歩いていった。

それから数日が経ち、土曜日になった。

あの日以来俺は天野さんを見なくなった。

元から会わなかったから元に戻っただけ———とは言えないよな。

それよりもだ！

俺はゆっくりと部屋中を見渡す。

今日は初めて彼女である羽川さんが俺の家に遊びに来る日だ。

今から緊張する！

というか、少し前まで彼女いない暦Ⅱ年齢だった俺にこんな素敵イベントに対応するなんて持ち合わせていない。

そのためもあるのか、かなり緊張してきた。

俺が挙動不審に周りを見渡していたらインターホンが鳴った。

来た！

俺は玄関に向かい扉を開ける。

そこには、彼女が立っていた。

普段見慣れた制服姿ではなく可愛らしい私服姿の彼女

羽川さんがそこにいた。

「おはようございます橘君」

「おはよう羽川さん」

朝の挨拶をしながら俺は今日という日が始まった事に嬉しさを
感じるのであった。

彼女である羽川さんと密室で2人っきりになるのは初めてのことで。

正確に言えば、同年代の女性とだけどな。

そんな俺と同じくらい緊張してるっぽい羽川さんも同じなんだろう。

普段は話題に困らない俺達なのに、状況が変わるだけでこうも静かな時間が続くだなんて……

そんな俺達の静寂を切り裂いたのは、再度鳴ったインターホンの音だった。

俺がその音を聞いて立とうとしたその瞬間に

玄関から大声で聞こえた。

「祐司!!」

「「ッ!?!」」

俺と羽川さんは聞き覚えのある声に思わず身構えた。

「祐司！ 早く開けてよ！」

ドアを力強く叩きながら何度何度も繰り返す言う。

「天野……さん？」

羽川さんが彼女の名前を呟く。

「祐司！」

居るのは知ってるんだよ！」

なんで部屋を知ってる！？

何で知ってるんだよ！？

「橘君！」

焦っている俺に羽川さんは冷静に声を掛ける。

「近所迷惑だから帰ってもらいましょう」

羽川さんの言う通りだよな。

俺は立ち上がり玄関に向かった。

「祐司！」

ドアを開けて直ぐに私服姿の彼女——天野さんは俺に抱きついてきた。

「何か用、天野さん」

「私と祐司に会うのに用なんていらない。

私達は2人でいることに意味があるんだから。

そうでしょ祐司」

天野さんはそれが当然かのような口振りで言う。

「ごめん、近所迷惑だから帰ってくれないかな？」

「……私には帰れって言うんだ」

天野さんは俺にギリギリ聞こえるぐらいの小声で続ける。

「私は知ってるんだよ。

今は羽川さんが居るんですよ」

えっ？　なんで

「私は邪魔者扱いするんだ。

羽川さんじゃなくて、私を邪魔者扱いするんだ」

なんで知ってるんだよ！？

「……変わったよね」

天野さんは俺を見ながら、何か昔を思い出すかのように言う。

「……変わった？」

何が変わったんだ？

天野さんは俺の何を知ってるんだ！？

「祐司は覚えてる？」

まだ私達が子供の頃にした約束」

約束

俺はそれを聞いて、思い出してみる。

思い出そうと頑張ってみる。

でも、無理だ

何を思い出せない。

そんな俺の目を真っ直ぐ天野さんは見る。

「……覚えてないんだ」

目に見て分かるくらい天野さんは落ち込む。

そんな天野さんを見てると思い出せない俺に罪悪感が湧いてきた。

「私は祐司と約束したんだよ」

俺に優しく言い聞かせる天野さん。

「まだ子供だった私達の約束」

そんな天野さんの言葉を聞きながら、俺は思い出そうと頑張る。

「結婚しようって、祐司は言ってくれたんだよ」

———えっ？

それを聞いて、俺の思考が一瞬止まる。

だからだろう

その隙を突かれたんだろう

その時に天野さんは

俺は

俺と天野さんは

キスをした。

俺の目を真っ直ぐ見ていた彼女からのキスだった。

気が付いた時には天野さんの顔が俺の視界を奪っていて、次の瞬

間には――――

「ッ！ いきなり何を!？」

俺は彼女の肩を掴んで、俺から離す。

「二度目のキスだよ。

昔は祐司からしてくれたから、今度は私からしちゃった」

そう言うとき天野さんは一旦止めて俺の目ではなく、俺の背後をチラリと見る。

そんな彼女の目線なんて細かいことに俺は気付かなかった。

「何で、その、キ、キスなんてしたんだよ!？」

「何でって」

彼女は俺から一歩後ろに下がって離れる。

「私が祐司のお嫁さんだから」

恍惚とした表情で

愛しいモノを見るような目で

天野さんは俺の嫁を名乗った。

幼き頃に交わした約束を真にした彼女は「だから」と続ける。

「羽川さんに祐司は奪わせない。」

万が一に奪われても私が奪い返す。

祐司の彼女は

祐司の隣に居座るのは

祐司の傍にいていい女性は

私だけだ!!」

俺ではなく羽川さんに言ってるようなセリフを吐くと、彼女は俺に背を向ける。

「私は祐司のお嫁さんだから」

そう言って歩きだす天野さん。

「お嫁さんだから」

二度も言うのと、まるで自身に言い聞かせてるように聞こえる。

そんな天野さんの背中を見ていた。

いや、天野さんから目が離せなかった。

子供の頃の約束なんて戯れ言を真にした彼女

そんな彼女の思い人であり、約束を交わした男である俺

でも、俺には既に彼女がいる

羽川さんがいるんだ。

……天野さん

俺は天野さんの思いには――――

「橘君」

「ッ！」

普段とは違い冷たい声がした方を見る。

俺の背後には、羽川さんがいた。

気付かなかった。

何時から居たんだろうか。

「私帰りますね」

えっ？

いきなり何で？

もしかして……聞かれてた……？

「先程、お母さんから電話で帰ってこいって言われたんです」

聞いても無いのに帰る理由を述べると靴を履き、俺に頭を下げる。

「私から遊びに行きたいって言ったのに、我が儘ばかりですいません」

「あっ、別にいいよ！」

俺は彼女の行動に慌てながら続ける。

「また遊びに来てね」

「いいえ」

羽川さんは即答すると頭を上げる。

「今度は橘君が私の家に来る番ですよ」

そう言って歩きだす羽川さん。

「ずっとですけどね」

小声で彼女は付け加える。

ずっと？

何が？

……いや、今日は疲れたし少し休もう。

俺は扉を閉めて、自室に向かった。

――――

日曜日に彼女である羽川さんからメールが来た。

内容は

月曜日は学校を休みますので、橘君を迎えに行きません

というものだ。

真面目な羽川さんが休むとしたら、熱でもあるのかと思ったが彼女曰く休みの理由はそういうのではないらしい。

土曜日に言っていた家族からの電話というのはもしかしたら葬儀の電話だったのかもしれない。

真面目な彼女が体を壊してないのに休む理由だなんてそれ位しかないだろ。

そして、彼女が来ない月曜日の朝

鳴らないと思っていたインターホンが鳴った。

新聞の勧誘かな？

俺は何も考えずに扉を開けると

「祐司、迎えに来た」

そう言って俺と腕を組む彼女、天野さん。

「天野さん!？」

天野さんの家は逆方向のはずだ、なのに何で……

「ほら、早く行かないと学校遅刻しちゃう」

そう言って俺を引っ張る天野さんの顔を見る。

満面の笑みを浮かべながら、歩いていく彼女

そんな彼女の腕を振りほどこうと一瞬考えたが、止めた。

いや、出来なかった

そう言って俺と腕を組む彼女、天野さん。

「天野さん!？」

天野さんの家は逆方向のはずだ、なのに何で……

「ほら、早く行かないと学校遅刻しちゃう」

そう言って俺を引っ張る天野さんの顔を見る。

満面の笑みを浮かべながら、歩いていく彼女

そんな彼女の腕を振りほどこうと一瞬考えたが、止めた。

いや、出来なかった

彼女の顔を見ていたら、出来なかった。

俺はそんな彼女と共に駅に向かった。

――――

駅のホームにて、電車が来るのを待っていたら携帯のバイブが振動を始めた。

俺は携帯を取ると液晶には彼女の名前が書いてあった。

こんな時間に電話だなんて珍しいな。

「もしもし、どうかしたの羽川さん」

俺は電話に出ると彼女――――羽川さんは用件を口にした。

「天野さんは居ますか？」

天野さん？

俺は隣を見る。

そこには変わらず嬉しそうな顔をしている天野さんがいた。

「いるよ」

彼女に嘘を吐きたくないと思っている俺は正直に応えた。

「離れてください」

「えっ？」

急に言われても

というか、何で密着してることを知って……いや、そういうえごの間腕を組んでたところを見られたっけ。

「天野さん、少し離れていい？」

彼女である羽川さんからしたら彼氏が他の女と腕を組んでたら良い気持ちではないよな。

今の俺の彼女は羽川さんだ。

だから、天野さんに優しくするのはいけないよな。

「……祐司が言うなら」

そう言って俺から少しだけ離れる天野さん。

その顔は悲しそうで、今にも泣き出しそうな雰囲気だ。

「ありがとうございます橘君」

「ありがとうございます橘君」

羽川さんの声が2回聞こえた。

1つは携帯から

——もう1つは直ぐ隣から

「————えっ」

「————えっ」

また2回聞こえた。

でも今回は羽川さんではなく

「天野さん!?!」

「天野さん!?!」

俺の隣にいた天野さんが、線路に向かって落ちていく。

「祐————」

天野さんが俺に手を差し出した瞬間

その次の瞬間

俺が目にしたのは、電車が彼女を引く瞬間で

俺が耳にしたのは、携帯から

そして、直接聞こえた

天野さんの叫び声だった。

「……えっ」

突然の出来事だった。

「なん……」

一歩下がる。

下がった時の足音が少し違い、少し滑った。

恐る恐る、俺は下を見る。

そこには

俺の足元には

天野さんのであろう片腕と

それを中心にした血溜まりがあった。

「あっ」

俺は腰を抜かして、その場に座り込む。

その瞬間に周りに居合わせた人も事態を把握したんだろう。

各々が叫びだした。

俺はそれを聞きながら、震える手で持った携帯を見る。

羽川さんからの電話は既に切れていた。

羽川さんの声が隣から聞こえた。

その時に天野さんは線路に落ちた。

俺は階段を見る。

周りは叫ぶだけで何もしいなか1人階段を上っていく姿が見えた。

俺は震える足で立ち上がり、その人影を追うように走りだした。

階段を上る手前で俺は先程まで俺がいた場所を見る。

そこには未だに天野さんの腕がある。

どうして

どうしてこんなことを

俺は再び走りだした。

人影が逃げた場所は駅から直ぐ近くのビルとビルの間にある細い

通路だ。

俺がギリギリ通れるぐらいの通路に人影は入っていった。

それを追いかけるように俺もその通路に入る。

細い通路を抜けると少しばかり大きい通路にでた。

その先は行き止まりで人影は目の前にあるフェンスを見ていた。

「ここまで血が届いてますよ」

フェンスには少量の血が付いており彼女はそれを眺めながら呟く。

「……羽川さん」

俺は天野さんを押したであろう彼女————羽川さんを見る。

「何で……あんな」

「だって、橘君を私から奪おうとしてたじゃないですか」

羽川さんは壁を向くと続ける。

「橘君の隣にいていいのは私です。

私だけです。

だから、天野さんは邪魔です。

私から橘君を遠ざけようと思いましたから、邪魔です」

羽川さんは俺の方を見る。

俺を見る。

恍惚とした表情で

愛しいモノを見るような

天野さんが俺を見ていた時のように

俺を見る。

「でも、もうそんな心配はいりません。

私と橘君は永遠に隣り合わせです。

もう私達は離れることはありません。

幸せですね。

理想的ですね」

羽川さんは先程まで手ぶらだったはずだ、だが、今は両手に大きなバックを手にかけていた。

「私は橘君のことなら何でもわかります。

橘君の行動パターンもわかります。

ですから、私を追いかけてここまで来るともわかってました」

羽川さんは俺にバックを見せ付ける。

女性である羽川さんが持つには不釣り合いな大きさのバックだ。

「このバックを探すのも大変でした。

橘君を入れるためには大きめのバックじゃないといけませんから

ね」

「俺を……入れる」

思考がまとまらない。

羽川さんが言ってる意味がわからない。

理解できない。

「大丈夫ですよ。

痛いのは少しだけですからね。

でも、痛くしますから気を付けてくださいね。

橘君の苦痛で歪んだ顔を私に見せてください」

羽川さんが俺に向かってゆっくりと歩いてくる。

彼女は途中で何かを拾う。

それは、ホームセンター等で売っているのこぎりだった。

のこぎり

大きめのバック

俺を入れる

羽川さんが近づいてくるたびに考えがまとまる。

ヤバイ。

そう思い俺はこの場から急いで逃げようとする。

でも、体が言うことを聞かない。

走ろうとしたら、脚が絡んでその場で倒れた。

「逃げなくても大丈夫ですよ。

もうじき私達は幸せになりますから」

独占的が強い

確かに彼女はそう言った。

でも

だからって

何でこんなことをするんだよ！

口が上手く動かない

足が上手く動かない

手が上手く動かない

怖い

逃げたい

死にたくない

死にたくない！！

「これからずっと一緒ですよ」

のこぎりを振り上げながら、羽川さんは言う。

「私もあなたを愛してますよ橘君」

その声を聞きながら

優しい声を聞きながら

俺は意識を手放した。

――――

後日談といいますが、私と橘君のその後

私は橘君をバラバラにしてバックに詰めて家に持ち帰りました。

それから3日もしない内に警察の人達が来て橘君を私から奪おうとしてきました。

咄嗟の判断で私は警察が橘君に触れる前に、払いました。

そしたら、他の警察の方が私を殺人容疑で捕まえると言ってきたのです。

橘君に触れようとした虫を殺したのはそんなにも駄目なことだったのでしょうか。

私は捕まってしまう橘君と離れなれになっています。

橘君に会いたい

橘君に触れたい

橘君の隣にいたい

橘君の傍にいたい

私は何時も呟きます。

愛しの彼の名を。

私は何時も思っています。

愛しの彼のことを。

橘君もそうですよね。

橘君も私のことを思ってくれていますよね。

橘君は私のことを何時でも愛してくれていますよね。

———知ってます

私は橘君のことなら何でも知っています。

だから、わかっていますよ。

私もあなたを愛していますからね。

橘君

(後書き)

こんにちはー勲bでーす

今回は何故一次短編を書こうとしたのかと言うと

逆お気に入りユーザー登録300達成&投稿小説40作品突破記念として一次を書きたかったからです!!

今回の短編は連載で考えていたものですので、所々省いています。

雑ですねwww

次に私が一次を書くのは何時になるのかな？

逆お気に入りユーザー登録が500達成したら書く活動報告に言いましたが、夢のまた夢ですね。

もしかしたら近いうちに一次の連載を書くかも？

それでは、これを読んでいる貴方とまた会えることを願いながら、今回の後書きはこころで止めるとしましょう。

PS感想くれたら嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427ba/>

病みつき彼女

2012年1月14日22時50分発行